

聖ソフィア教会の歴史と現在

キリスト教は313年、ローマ帝国のコンスタンティヌス1世によって公認されたが、皇帝は都をローマからコンスタンティノポリス（現イスタンブール）に移した。当然キリスト教の諸活動もそこが中心となった。その中心の教会が、聖ソフィア教会である。その教会は537年に東ローマ帝国のユスティニアヌス1世によって築かれた。彼は世界で一番美しい教会であることを望み、教会の智慧（ソフィア）の中心、また東方の光として建造されたので、その美しさは類稀である。教会内のモザイク画の美しさ、調度品の豊富さ、それらは聖心を飾る物であり魅惑的な物である。コンスタンティノポリスはキリスト教の特別な町とされ、新しいローマと呼ばれた。その後、東方正教会（ギリシャ正教会）中心としてギリシャの影響を受けたビザンティン文化が栄えたが、その住民は「ロミオイ」、「ローマニ」と呼ばれていた。（今でもトルコ人はギリシャ正教の人たちを“ルーム”と呼んでいる）。

その後、第4回十字軍の遠征により、1204年の十字軍の下に東ローマ帝国は敗れ、聖ソフィア教会はカソリックの教会となった。1204年から1261年まで、カソリックの教会として、ローマ風の儀式が行われていた。しかし1453年、コンスタンティノポリスを占領したオスマン帝国のメヘヒット2世は聖ソフィア教会ですぐに、イスラムの礼拝施行を指示し、教会をモスクに変更し、これを町の中心とした。モスクの屋根はローマのパンテオンを模し、周囲を支配する中心的建築物とした。時は流れて1935年2月1日、トルコ共和国のムスターフ・ケスール・アタトゥルク初代大統領の望みによって、聖ソフィア教会は博物館となった。この博物館は、世界で最も訪問客、見学者の多い所であった。ところが、2020年6月、エルドアン現大統領は、聖ソフィア教会をイスラム教のモスクにすると公表。7月24日からモスクとして、再出発すると発表したのだ。

7月12日のアンジェルスのお話の際、フランチェスコ法王は、聖ソフィア教会がモスクになることを嘆き、その心の痛みを訴えた。それに対して、トルコは、教会の中のモザイク画、フレスコ画には手をつけたいことを表明した。イスタンブールのバルトメオ主教はイスタンブールを、特にソフィア教会を中心に「会合の中心地」「対話の中心地」「キリスト教とイスラムの相互理解の地」と訴えていた。

隣人をしっかり見つめ、愛せ

フランチェスコ法王は『聖書』を引用して『イエスの眼差しをもって』という本を刊行した。この書物では、共観福音書に基づき、一人の裕福な若者とイエスの言葉のやりとりを記している。法王は、「マルコ伝」10章21節を引用しながら話を進めている。それは次の通りである。この若者がイエスに言う。「主よ、この財産は私の若い時から、全て見守ってきた物です。」するとイエスは、彼を見つめ、彼に言った。「お前には一つのこと欠けている。行きなさい。そして持っているものを売り尽くし、それを貧しい人に施しなさい。そして、おまえは天国で宝物を得るだろう。来なさい。私に付いて来なさい。」この

言葉で彼の顔は青ざめてしまい淋しくなりなり、何処かへ消えていった。

確かに彼には豊富な財産があった。この若者は永遠の生命を得るために、何をしたらいいのか問うている。この短いやり取りの続きを記しているのは「マルコ伝」だけだ。「キリストは彼を見据え、彼を愛した。」この中に真実があり、愛がある。人であるために、意を尽くすことであり、世界と共に共感することであり、そして、他者と接し、関係を結ぶことである。簡単に言えば、愛をもって、人を考え、人を見つめ、目を逸らさないことだ。イエスは自分を裏切ったユダを「友よ」と呼びかけている。その眼差しはペトロに対してもヨハネに対しても同じだった。イエスは神の子であり、神は愛である。「人間は情報を交換する能力があるだけでなく、共感を構築する能力もある。言葉というものは、各所にいる人たちを、共通の場に結びつける懸け橋の役割を持っている。このアプローチは、人の立場を理解することである。人は自由の中にあつて、人を愛することができる。ただ真実の愛だけが、人を許し、自由にする。このように『マルコ伝』の話は終わっている。」

なぜマルコはこんな話を挿入したのだろうか。それは、この若者は財産があり、財産は人を変えるからである。財産が善の発揮を抑えるのだ。この状態で、愛するということが難しい。自らの財を忘れ、人を見つめ、愛を注ぐことが大切なのである。

ユダの得たお金は

イエス・キリストを裏切り、お金を得たユダはそのお金を何に使ったのだろうか。お金は硬貨で30枚だった。その30枚が、不思議なことに現在54枚となってヨーロッパのあちこちに保存されている。イタリアのポローニャには9枚あり、マルタ島やフランスのスワソンには各3枚、スペインでは、カステルヴィ・デ・ロザネスとヴァレンシアに2枚ずつ、遠くはヘルシンキからロードトス等まで1枚ずつ、さらには、モスクワの近くのロシアでも、クロアツィアのニンにも1枚ずつある。ユダが得たお金はどのように使われたのかは分っていない。ともあれ、中世にはその硬貨について色々と言話が生まれたのである。その一つとしてその硬貨の生まれと流れを書いてみよう。

その硬貨はアブラハムの時代からあるものと伝えられている。父祖テラッハがアブラハムのために作らせたというのだ。それは金貨だった。それがアラビア人の手に渡り、そのお金がヨハネを買うために使用される。さらに、時が経って、シバの女王の手に入り、王様のソロモンに贈られた。しかしバビロンのイスラエル侵入によって、硬貨は壊された。それがキリスト誕生の時に、東方3博士がやって来て、処女マリアに捧げた。マリアがしばらく保存していたが、マリアはエジプト逃走の時に失ってしまった。けれどもそれは、ある羊飼いに発見された。羊飼いはそれをイエスに捧げようとしたが、イエスはそれを断り、イスラエルの神殿に捧げるように進言した。それが時のイスラエルの聖職者の手に渡り、最終的にはユダに渡ったというのである。この伝説は、硬貨の由来により宗教的重みを与える内容として、とても興味深いものと言えよう。